

優秀修士論文概要

中世ロシアの聖地巡礼記録に反映された巡礼者の価値観と揺らぎ

—『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記』を題材として—

西 角 美 咲

1. 目的・史料・観点

本稿の目的は、12世紀初頭にエルサレムを訪れたダニイルが、いかなる価値観のもとでいかに人と関わったのかを、『ルーシの地の修道院長ダニイルの聖者伝および巡礼記⁽¹⁾』（以下『巡礼記』とする）から分析することである。

『巡礼記』では、ダニイルの訪問地が詳細に描写され、聖書の物語や伝説についての説明がなされている。『巡礼記』はルーシ初の詳細な旅の記録であり、記録内の情報の正確性が高く、史料的価値も高い。マレート（2005）は、19世紀の記録と比べた際の誤差の小ささを示し、ダニイルの記述する距離の正確性を確かめている⁽²⁾。また、写本の多さも情報源としての価値の高さを示している。ゼーマン（1970）によれば、15世紀から19世紀までの『巡礼記』の写しは148種類存在する⁽³⁾。『巡礼記』は、コチュリャーエヴァ（2008）が評価するように、「聖書の出来事が起こった場所の地誌を多かれ少なかれ明らかにした⁽⁴⁾」、実用的な文献である。

本稿では、「境界性」、「コムニタス」、「帰属意識」という3つの観点から『巡礼記』を分析する。前者2つは、イギリスの人類学者ターナーによって提起された概念である。ターナー（1997）は、本来位置すべき場所から逸脱した状態を境界性と呼び、その中で見いだせる共同体や平等な個人の集団という人間関係を、コムニタスと定義づける。彼は巡礼を境界的現象とし、巡礼における社会関係がコムニタス的特性を持っていると指摘する⁽⁵⁾。しかしイーデとサルノウ（1991）によれば、ターナーの指摘とは反対に、巡礼者が元集団への帰属に傾斜する事例がある。つまり、旅には「境界性」や「コムニタス」では説明できないような側面がある。本稿では、その側面に対応する観点として「帰属意識」を用いる。すなわち、「境界性」および「コムニタス」は規範からの逸脱であり、「帰属意識」は規範の再認識である。

(1) Хождение Игумена Даниила / Сост., коммент. Г.М. Прохорова // Библиотека литературы древней Руси.: В 20 т. Т. 4. XII век. / РАН. ИРЛИ. СПб.: Наука, 1997. 687с. С. 26–117, 584–599.

以降ここから本文を翻訳して引用する際は、カッコ書きで頁数を示す。

(2) Малето Е.И. Антология хождений русских путешественников XII–XV века. М.: Наука, 2005. С. 107–108.

(3) Klaus-Dieter Seeman. Abt Daniil: Wallfahrtsbericht (Slavische Propyläen, 36), Munich, 1970, LXV–LXXII.

(4) Кочеляева Н.А. Паломничество в контексте русской культуры XII–XVII вв. // Вестник Кемеровского государственного университета культуры и искусств, 2008. № 6, С. 39.

(5) Turner, Victor W. Dramas, Fields, and Metaphors; Symbolic Action in Human Society. NY: Cornell University Press, 1974. p. 166.

2. 先行研究

『巡礼記』を用いた先行研究群には、主に三つの論点が存在する。一つ目はダニイルの巡礼目的である。松木（2018）はダニイルがルーシの代表として行動していることから、彼の巡礼に外交という目的を読み込んでいる。ダニーロフ（1954）やリハチョフ（1958）など、より具体的な目的を推測する者もいるが、栗生澤（2015）はそうした説はどれも憶測の域を出ないとしている。二つ目は巡礼への捉え方である。当時のルーシの聖職者らは、集中と自己沈潜によって育まれた信仰心が旅の際の印象の変化によって妨げられる⁽⁶⁾ため、巡礼を抑制すべきと考えていた。三つ目は対カトリック感情である。フェンネル（2017）は『巡礼記』には反カトリック要素が少ないと評価しているが、ポツカルスキー（1996）は、ダニイルの巡礼前後に発生したとされる反カトリック論争を複数列举している⁽⁷⁾。当時のルーシには反カトリック感情が存在したのである。

ここで批判すべきなのは、第三の論点である。『巡礼記』内には正教の正統性を主張する部分がある一方で、カトリックに対して友好的な記述もある。誤解を恐れずに言えば、程度の問題こそあれ、『巡礼記』は反カトリック的であるという言説と、そうではないという言説は、どちらも成立しうる。ゆえに、『巡礼記』をある一言説の補強材料として使用するの、真の意味で『巡礼記』の記述に立脚した行為ではない。

巡礼、ひいては旅という行為は、旅先の社会や人間と関わり、自らの価値観を強化したり変化させたりする「過程」である。この認識があれば、我々は旅で何が起きていたのかをより正確に把握できるし、その旅が同時代においてどのような意味を持っているのかを理解できるようになる。本稿では、『巡礼記』を巡礼過程の反映ととらえ、ダニイルの価値観と彼の巡礼過程における振る舞い、その関連を論じる。

3. 考察

ダニイルは、カトリックの儀式（聖餅を用いる）ではなく正教の儀式（パンとぶどう酒を用いる）が正しいと主張している。また、聖墳墓の灯明の輝き（正教徒の灯明は光り輝き、カトリック教徒の灯明はともらない）の記述を通じて、正教とカトリックの優劣を強調している。ダニイルは自らの属する正教という枠組みとその正統性を、巡礼中も意識していたのである。また、彼は聖墳墓でエルサレム王ボードゥアン1世に対し、「灯明を全ルーシの地から聖墳墓へ置くよう、私に命じてください！（108-109）」と発言する。さらに彼は、聖サツヴァ大修道院でルーシの諸公のために祈ったと述べている。そして『巡礼記』は、ルーシの諸公らへの言及と「兄弟と主の方々」への呼びかけで締めくくられている。ダニイルは自らを正教徒のルーシ人と認識している。

このように、『巡礼記』中にはダニイルの帰属意識が透けて見える。ダニイルは自らをルーシ人正教徒と認識していた。このアイデンティティは、時代情勢の影響を受けながら形成されたものである。ダ

(6) Поселенова Е.Ю. Феномен русской паломнической литературы в контексте духовного образования. // Вестник Кемеровского государственного университета культуры и искусств, № 19–2, 2012, С. 261.

(7) Подскальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988–1237 гг.) // 2-е изд., испр. и доп. для рус. перевода. Перевод А.В.Назаренко, под ред. К.К.Акентьева. СПб: Византинороссика, 1996. XX+572 с. (Subsidia Byzantinorossica. T. 1) С. 280–303.

ニイルの巡礼当時には反カトリック論調がすでに存在し、高位聖職者たるダニイルもその文脈を共有していた。ルーシで生まれた彼のアイデンティティは、巡礼中も保持された。故郷とは異なる環境に身を置くことで、むしろ元集団への帰属が意識されるという特徴が、ダニイルの巡礼にもあった。

一方、ダニイルは記録の中で「聖なる町エルサレムが見えると、全てのキリスト教徒に大いなる喜びが溢れる (34-35)」と述べている。ダニイルは「全てのキリスト教徒」という文言で、正教徒とカトリック教徒をまとめて記述した。この記述は、正教徒ダニイルがカトリック教徒に対して、仲間意識を持った証拠である。そしてダニイル一行が修道院を訪れた際、カトリック教徒は「飲み物、食べ物、あらゆるもので、私達へ大いに敬意を払った (104-105)。」カトリック教徒は巡礼団を教派の違いによって冷遇しなかった。カトリック教徒側もまた、正教徒に対して仲間意識を持ったのである。

このように、ダニイルは正教の正統性を述べつつも、カトリック教徒と友好的な関係性を築くことに成功している。彼は同時代の反カトリック姿勢を共有しつつ、それに完全に抛り立つことなく巡礼を遂行している。ダニイルは、同時代的偏見とそこから逸脱した見方の共存を成し遂げ、境界的な人間になった。そしてこの境界性は、カトリック教徒と正教徒によるコミュニタスを生んだ。

参考文献

一次史料

Хождение Игумена Даниила / Сост., коммент. Г.М. Прохорова // Библиотека литературы древней Руси.: В 20 т. Т. 4. XII век. / РАН. ИРЛИ. СПб.: Наука, 1997. 687с. С. 26–117, 584–599.

論文・書籍

ロシア語

Данилов В.В. К характеристике «Хождения» игумена Даниила // Труды Отдела древнерусской литературы.: Т. 10. / ИРЛИ; отв. ред. В. П. Адрианова-Перетц. М.; Л.: Изд-во АН СССР, 1954. 507 с. С. 92–105.

Иванов А.А. История российского туризма (IX–XX вв.) М.: ФОРУМ, 2020.

Кочелева Н.А. Паломничество в контексте русской культуры XII–XVII вв. // Вестник Кемеровского государственного университета культуры и искусств, 2008. № 6, С. 34–42.

Малето Е.И. Антология хождений русских путешественников XII–XV века. М.: Наука, 2005.

Подскальски Г. Христианство и богословская литература в Киевской Руси (988–1237 гг.) // 2–е изд., испр. и доп. для рус. перевода. Перевод А.В.Назаренко, под ред. К.К.Акентьева. СПб: Византинороссика, 1996. XX+572 с. (Subsidia Byzantinorossica. Т. 1)

Поселенова Е.Ю. Феномен русской паломнической литературы в контексте духовного образования. // Вестник Кемеровского государственного университета культуры и искусств, № 19–2, 2012, С. 260–268.

日本語

栗生沢猛夫『「ロシア原初年代記」を読む キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書』成文社、2015年

フェンネル（宮野裕訳）『ロシア中世教会史』教文館、2017年

松木栄三『ロシアと黒海・地中海世界 人と文化の交流史』風行社、2018年

英語、その他

Eade, John, & Michael J. Sallnow. *Contesting the Sacred: the Anthropology of Christian Pilgrimage* / Edited by

- John Eade and Michael J. Sallnow. London: Routledge, 1991.
- Seeman, Klaus-Dieter. *Abt Daniil: Wallfahrtsbericht* (Slavische Propyläen, 36), Munich, 1970.
- Turner, Victor W. *Dramas, Fields, and Metaphors; Symbolic Action in Human Society*. NY: Cornell University Press, 1974.
- *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. Renewed by Edith Turner. New Brunswick, NJ: Aldine Transaction, 1997.

優秀修士論文概要

『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義

——旧約聖書ヨブ記との構造的相関に着目して——

町田 航大

本研究は、ドストエフスキーの長編小説『カラマーゾフの兄弟』を、旧約聖書ヨブ記との構造的相関という面から検討することにより、この作家がキリストの受肉の意義をどのように理解し直そうとしたのかを解明することを目的とする。

無神論が浸透し、キリストの神性が否定される風潮のあった19世紀ロシアで、ドストエフスキーはキリストとは何かという問いと向き合い、キリストの受肉という出来事がいま・ここにおいて有する意義を捉えようとした。こうしたキリスト論的側面に着目してこの作家の作品の宗教的主題を論じる研究は近年盛んである。こうした研究においては、ベルジャーエフ『ドストエフスキーの世界観』(1923)に代表される哲学的アプローチが古くからなされてきたが、近年は自らのキリスト教思想をドストエフスキーがどのように表現したかという方法上の問いへの関心が高まり、聖書や聖者伝、古儀式派の著作などの宗教的文献の引用や引喩等をこの作家の創作の中に読み取るアプローチが増えている。なかでも新約聖書(福音書)の影響の解明は、現代のロシアの研究における主要なテーマの一つである。

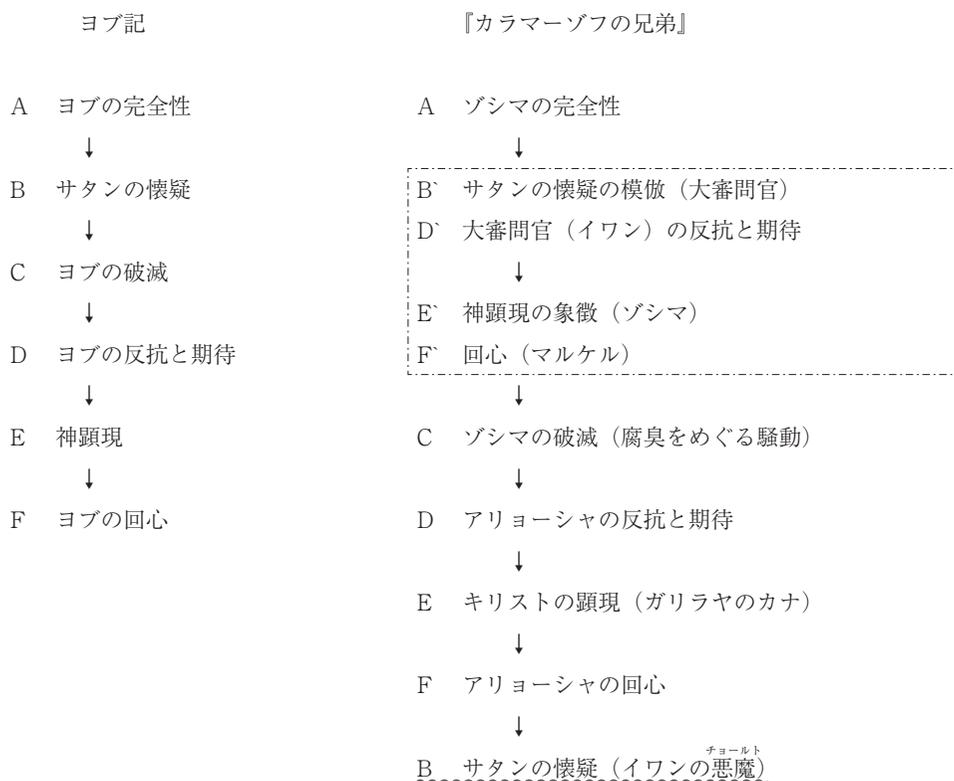
これに対し、本論は旧約聖書ヨブ記の影響という観点から、『カラマーゾフの兄弟』における作者のキリスト探求の方法を検討した。ヨブ記はこの作家の愛読書であったほか、「キリスト以前の人間」による神探求の記録でもあり、無神論が広まった時代の中でキリストを再び探し求めるという作者の創作上の課題に適していた。ヨブ記では、旧約の応報思想によって自分の苦痛が合理化されることに反発したヨブが、神に直接訴えた後、神の顕現を目にして回心する。本論では、ヨブのこの内的プロセスが「キリスト以後」を生きる『カラマーゾフの兄弟』の主要人物によっていかに反復されているかに着目することで、この作品におけるヨブ記的な神探求と相関関係にある「キリストの発見」のプロセスを明らかにした。

論の構成

本論は6つの章で構成され、第1章は前提となる作者の思想や時代背景の概観、第2章から第5章は小説テキストとヨブ記の具体的な比較分析(ヨブ記テキストは当時のロシア語訳聖書(宗務院訳、1876年)を用いた)、第6章は分析結果の総合および結論である。

第1章では、ドストエフスキーにとって「神人」キリストが決定的意義を有していたこと、この作家が同時代の「キリストの喪失」の風潮を危惧し、近代人がキリストのリアリティを再発見する内的プロセスの芸術的表現を自らの課題としていたことを確認した。また、『カラマーゾフの兄弟』におけるその課題の実現において作者がヨブ記を土台としたという観点から、ヨブ記の主題や、ロシア文化圏におけるその受容と変容、さらにドストエフスキー個人による受容の特徴を確認した。その後、B. リヤーフによる引喩の類型論(2019)を参照し、単なる語彙や主題などの重なりと異なる、構文や発話の抑揚、

情緒、言葉が発せられる状況などが組織をなす長い文章単位での類似・相関（構造的相関）という引喩の概念に立脚して、本論で分析する『カラマゾフの兄弟』におけるヨブ記との構造的相関の概要を以下の図で説明した。



第2章では、ヨブ記との相関の導入をなす劇詩《大審問官》の場面を分析した。まず前提として、ドストエフスキーも含めた19世紀ロシアの宗教思想家たちが、「神が人となったのは人が神になるためであった」というキリストの受肉の正教的解釈にもとづく「人類の神の変容」の終末的ヴィジョンを思想的基盤としていたことを確認した。だがこの「変容」の理想は大審問官（イワン）によって、人間の手には負えない神の理不尽な要求であると非難される。ここに、同時代の「ドグマ」を現実^{チョコレート}に即して拒絶するヨブとの相関の端緒が見出され、キリストの受肉に対する大審問官のアンチテーゼ的な発話の中で、無力な人間に過大な要求をする神に対するヨブの反抗と、神に救いを求めるヨブの心理が反復されている。また大審問官の否定的発話をこの観点から考察することにより、彼がキリスト以後のパラダイムの自明性を「キリスト以前の人間の心理」の導入によって揺さぶり、キリストの受肉の意義を改めて見出すプロセスを作中で開始していることを明らかにした。

第3章では、大審問官（イワン）の開始したプロセスをゴシマの伝記と説教の場面が引き継いでいる点に着目し、彼の語りとヨブ記における神の応答との間の類似を分析した。特に、ゴシマの語りの挿入における小説の語り手の不介入や文体・叙述の変化、ゴシマの語りの抑揚などの形式的特徴の中にヨブ記の展開や文体との類似を読み取り、ゴシマとヨブ記の結びつきを、ゴシマによるヨブ記への直接的な

『カラマーゾフの兄弟』における「キリストの発見」の意義

言及箇所限定されない広い範囲で検討した。また、ゾシマがヨブ記38章の神の言葉と重なるように、いま・この地上と原初の創造の時とがすでに神秘的に一致していると説くことが、「変容」を前提とする正教的なキリスト以後のパラダイムを相対化し、大審問官への間接的な応答を示していることを論じた。

第4章では、大審問官とゾシマによって先取りされた思想的次元での相関を引き継ぐかたちで、ゾシマの腐臭事件に動揺したアリョーシャがヨブとの相関を現実の出来事のレベルで示していることを論じた。その際、「悪をなしたから災いがふりかかった」という応報の観念によって理不尽に断罪・嘲笑されることへの怒りや、災いをもたらした神への懐疑などの内容的相似だけでなく、ヨブを連想させる語彙や話法などの形式的な面でも、アリョーシャがヨブの心理を再現している点に着目した。またアリョーシャが、ガリラヤのカナの幻視の中で、ヨブ記における「神顕現」と「回心」の流れに沿ってキリストを「発見」した結果、ゾシマの語りと呼応するように、現在とキリストの受肉の時との本質的同一性に目覚めるというプロセスを検討した。

第5章ではイワンの^{チョールト}悪魔の発話を分析し、彼がヨブ記に登場するサタンと同一の役割、すなわち義人（ヨブ・アリョーシャ）の敬虔さを疑い、彼を試練にかけて真実の信仰へ至らせる役割を作中で担っていることを検証した。ゾシマの腐臭によってアリョーシャを誘惑したのはこの^{チョールト}悪魔であったことが、この小説の最終稿および創作ノートの種々の記述によって暗示されており、^{チョールト}悪魔の存在は本作品のヨブ記的構造を支えている。ただし、ヨブ記では最初に発せられ、ヨブの試練の引き金となる「サタンの懐疑」が、本作品では逆にアリョーシャのヨブ的回心が終わった後ようやく^{チョールト}悪魔によって提示されるという相違がある。これにより、本作品のヨブ記的構造では、ヨブ記との相関を通じた個人の「キリスト発見」のプロセス全体が最終的に再び疑問にさらされ、「発見」が完結を見ない。またゾシマとアリョーシャが達したような現在と原初の時の一致する感覚の裏側には、その感覚を生み出すために単調な仕事を繰り返している^{チョールト}悪魔が実感する永遠の虚無が存在し、二重の時間意識が作中で生起していることを論じた。

第6章では、前章までの分析をもとに、『カラマーゾフの兄弟』におけるヨブ記を通じたキリスト探求の方法がいかなる特徴を有するかを論じた。まず、神（キリスト）と人間の間に生じる間主観的体験、既存の正教的パラダイムからの逸脱（時間意識の変容）、キリストの「発見」を支えつつ同時にその意義を疑問に付す両義的なサタンという要素を抽出した。また、これらの特徴の独自性をより明瞭に示すため、ロモノソフ、グリーンカ、トルストイそれぞれのヨブ記を題材とした作品との比較を行った。その結果、ドストエフスキーがヨブ記原典の自由な拡張と変形により、懐疑と回心を循環する個人の動的で多元的な宗教的体験を、ヨブ記の構造という高度な統一の中で、「体験された事実」としてではなく「体験そのもの」として描いた点に彼の方法の意義があることを明らかにした。

本研究の意義

本論では、聖書の影響論を作者の時代のロシアの思想史的文脈と接続させ、作家による聖書を用いた創作方法を思想史的側面から意味づけようと試みた。ソ連崩壊後のロシアではロシア古典文学に対する福音書の影響の研究が盛んな一方、その研究の多くは聖書の引用やレミニセンスの箇所の指摘に留まり、あるいは現代のロシア正教の教義や礼拝にもとづく聖書理解を無批判に当てはめているため、文学テクストを、それを生んだ時代の様々な文脈（思想的・文化的・社会的・政治的）との複雑な関係に照らして考察する視点が欠けている。これに対し、本論は無神論の洗礼を経た後の「キリストの発見」という

思想的問題に焦点を当て、『カラマーゾフの兄弟』のヨブ記的構造の分析という聖書の影響論の中でこれを正面から論じ、ドストエフスキーの思想と彼の創作方法をつなぐ新たな可能性を示した。